

『西南学院百年史』編纂と 英文資料の活用

～英文の収集・翻訳から見てきた史実の紹介～

高松 千博

1. 学院における英文資料収集・翻訳の現状

主に宣教師の英文の書簡、日記、レポート等の資料（以下、「英文資料」）については、百年史編纂の作業が本格的に始まる2010年までは、その収集、保管、翻訳はほとんど手つかずの状態であったと言っても過言ではない。2005年から百年史編纂に向けた準備が始まり、委員会等も設置されたが、具体的、かつ本格的に作業が開始されたのは2010年に百年史編纂委員会（委員長：小林洋一神学部教授・当時。現名誉教授）が設置されてからであり、当委員会において英文資料の収集の必要性が協議された。

2010年、まず、学院史資料室に存在する英文資料の調査を行なったが、C.K. ドージャー（以下、「ドージャー」）の1928年の日記、M.B. ドージャー（C.K. ドージャー夫人）執筆の『SEINAN GAKUIN』¹（1963?）の他はドージャー、M.B. ドージャー、E.B. ドージャー（C.K. ドージャーの長男）、W.M. ギャロットの書簡やレポート等がわずかに残されているのみであった。筆者は1986年に学院創立70周年を記念してドージャーの生涯のテレビ・ドキュメンタリー番組を作成するに当たり、米国バージニア州リッチモンドのミッション・ボード（南部バプテスト外国伝道局。現南部バプテスト国際宣教局）、同ケンタッキー州レイヴルのサザンバプテスト神学校等を訪ね、ドージャー関連の書簡等のコピーを持ち帰っていたことを思い出し、資料室のどこかに存在することを期待しながら捜したところ、書棚の隅っこに他の未整理資料とともに古い封筒に入ったままの当資料を発見することができた。同時にいつから存在していたのかは不明だが別封筒に入った英文資料も発見することができた。そして、小さなダンボール箱2個に収められたW.M. ギャロットの書簡等も見出すことができた。

1 M.B. ドージャーが晩年（『西南学院七十年史』によれば1963年82歳の頃）、夫C.K. ドージャーの日記や書簡等を引用しながら1907年～1930年にかけての西南学院の様子などを英文タイプで書き遺したレポートで、A4判85ページから成る貴重な資料。

百年史編纂委員会開設の翌年度（2011年度）に初めて英文資料翻訳のための予算が計上され、既存の英文資料の中で百年史編纂のために有用と思われる資料から翻訳を始めた。翌2012年度には米国テネシー州のナッシュビルにある南部バプテスト歴史図書館（以下、「米国歴史図書館」）所蔵の資料収集のための予算が計上され、2012、2013の両年にかけて百年史編纂委員長である金丸英子神学部教授（以下、「金丸教授」）が米国において英文資料の収集を行なった。また、2013年にはK.J. シャフナー国際文化学部教授（現大学学長）がプライベートで同歴史図書館を訪問し、主にW.M. ギャロット関連の資料収集を行なった。

以上のような経緯を踏まえ、学院史資料室に現存する英文資料の状況は次のとおりである。

■英文資料の総数：計716本

- 以前から学院史資料室に保管されていた英文資料：47本
（前述の小ダンボール箱2個に収められたW.M. ギャロットの書簡等は除く）
- 1986年7月に米国で収集した英文資料：64本
- 2012年以降、収集した英文資料：605本

■2011年以降翻訳した英文資料の数：計133本

※2010年まで翻訳作業はなされていなかった。

2. 『西南学院百年史』編纂に係る英文資料の活用

前述したように、学院史の担当部署においては2010年までは英文資料の収集・整理・保管そして翻訳はほとんどなされていなかった。それでは『西南学院七十年史』（1986）（以下、『七十年史』）に掲載された英文資料は何を根拠に引用されたのかという疑問が残り、調査を行なった結果、次のような事実が判明した。『七十年史』上巻には、主にドージャーの日記、書簡など約20本が引用されているが、その根拠となるものは、『SEINAN GAKUIN』（前頁脚注参照）、『ドージャー院長の面影』（ドージャー先生追悼記念事業出版部、1934年）から引用されていた。すなわち、全ての英文資料が一次資料²を典拠としたものではなく、二次資料を典拠としていたのである。百年史編纂委員会において、こうした反省を踏まえた一次資料の収集が提議されたのは当然のことであったとすることができる。

2 何らかの事項に関する資料のうち、原典となる文献や資料そのものを指す表現。これに対して、一次資料について解説したり、一次資料を加工・編集した資料は「二次資料」と呼ばれる。

本来ならば英文資料の収集に際しては、米国の関連施設・機関にどのような資料が保管されているのかを把握し、その中から緊急性、重要性等を勘案しながら予算を計上し、計画的に実施していくべきであるが、『百年史』の刊行を数年後に控えた逼迫した状況の中、やはり『百年史』編纂に必要な資料、特にドージャー関連の資料を優先して収集することから始めざるを得なかった。最初の資料収集となった2012年9月には、事務局において『七十年史』の中で取り上げられた英文資料等を含む29点の資料（書簡13点、日記11点、その他5点）を厳選して金丸教授に現物の調査と複写の依頼を行なった。併せて米国歴史図書館所蔵資料で西南学院関連の資料の詳細を把握していただくことをお願いした（ネット検索によって所蔵資料の概容は把握できる）。

一方、翻訳作業は、米国における資料収集を始める前年の2011年から開始し、既存の英文資料の翻訳から取りかかった。2013年以降は、米国から収集した英文資料の内、『百年史』編纂に必要と思われるものを優先して翻訳を行なった。

3. 英文資料の収集・翻訳から見えてきた史実

前述したように2012年から英文資料の収集を開始したが、その中で、これまでになかった史実の発見やこれまで事実とされてきたこと（その多くは『七十年史』に掲載されていた）とは異なる事実を発見することができた。そのいくつかを紹介したい。本来ならばその証左となる資料を転載し、その翻訳も併記して紹介すべきであるが、原本を所蔵している機関（主に米国南部バプテスト歴史図書館）に公開することの承諾を得ていないことや翻訳の監修が行なわれておらず、翻訳の内容が不正確である可能性もあることから概容の記載のみにさせていただいたことをご容赦願いたい。

(1) ドージャーの1917年2月13日の日記と1927年2月13日の日記の検証

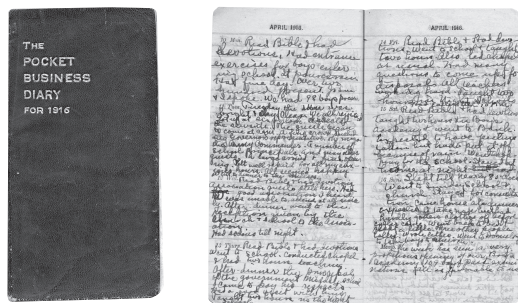
これは、元西南学院高等学校教諭の瀬戸毅義氏が『西南学院史紀要』第4号（西南学院百年史編纂委員会、2009、81-94頁）で取り上げられ、問題提起された事項である。すなわち、「C.K. ドージャーの祈り」として学内の刊行物によく取り上げられる「…天の父よ、これが現在の状況であります…」というドージャーの日記である。この祈りは、前出の『ドージャー院長の面影』³（9頁）によれば1927年2月13日の日記の内容ということになっている。ところが、前出のM.B. ドージャー著『SEINAN GAKUIN』では1917年2月13日の日記の内容ということになっている。瀬戸氏は同

3 この日記は、『七十年史』をはじめ、学院の諸刊行物にも多く引用されているが、出典は同書籍と思われる。

論文の中で「日記の原文を目にしていな現在の時点で」と前置きしながらも「前後の事情を判断すると、本来この祈りは1927年2月13日ではなく、1917年2月13日の日記であったと思われる」と述べている。そこで前述した2012年の米国歴史図書館での資料収集に際して金丸教授にお願いし、兩年の日記の複写をお願いした。その結果、1927年2月13日のものであることが判明した。

この日記に関しては、もう1点記しておかなければならないことがある。『七十年史』をはじめ、これまで学院で刊行された印刷物において、この日記は多く引用されているが、それは前出の「天の父よ、これが現在の状況であります…」で始まる部分である。この日記が書かれたのは1927年であるが、その時期は西南学院が日曜日問題で揺れていた時期であり、ドージャーもその渦中にいた時期である。そうした時期に書かれた日記ということで、この「天の父よ、これが現在の状況であります…」という一文が紹介されると、読者はドージャーが日曜日問題に苦しんでいる気持ちを日記に記したものであると思ってしまう。多分、読者だけでなく当該執筆者もそう思っていたのであろう。

ところが、今回、この日記を取り寄せ、全文を読んでみると、そこには、日曜日問題についての記述は全くない。南部バプテスト連盟からの支援が十分でなく、西南学院の財政が非常に厳しいことや家計も苦しいことなどを憂う気持ちのみが書かれている。日記中にある「これが現在の状況であります」というのは「日曜日問題を指しているのではなく、南部バプテストからの支援が不十分で西南学院の財政が非常に厳しい状況を指している」と言わざるをえないのである。



C.K. ドージャーの1916年の日記帳：表紙（左）と本文（右）
1ページに4日分、見開きで8日分が書けるようになっている。

(2) 1916年（西南学院創立年）のドージャー日記の検証

西南学院の創立年である1916年のドージャーの日記が存在することが第1回の米国資料収集で判明し、これはかなりの分量になるので、直接、米国歴史図書館の担当者にスキャンをお願いし、データで送っていただいた。実は金丸教授に西南学院と米国歴史図書館の橋渡しをしていただき、双方のスタッフ間でこのように直接取引ができる道筋を作っていただいたのは大きな成果であった。同日記から判明したいくつかの史実を紹介したい。

①創立年の入学試験日

『七十年史』上巻によれば、西南学院創立時の入学試験は1916年の「4月3、4日の両日行なわれ」（280頁。下線筆者）と記載されているが、同日記を検証した結果、4月3日の日記には「午後は試験に使う教室の準備を行なった」とあり、同4日の日記には「入学試験の監督をしに行った」、同5日の日記には「試験が行なわれ、95人が受験した」とある。西南学院創立時の最初の入学試験は「4月4、5日の両日行なわれ」が正しいと思われるが、『七十年史』記載の裏づけを再検証する必要がある。

②創立時の写真撮影日

学内の刊行物でよく目にする創立当時の在校生、教職員の写真（下）は、これまで1916年（刊行物によっては1916年4月）という記載しかなかったが、4月15日の日記には「写真撮影が予定されていたが、雨天のため延期となった」とあり、同17日の日記には「教職員と生徒の写真を3時半に撮影した」とある。同写真撮影の日がちが確定した。



③ ドージャーと福岡バプテスト夜学校⁴

1916年の日記を読むと、日中、ドージャーは誕生したばかりの西南学院での授業や諸々の業務に奔走しながら、夜は毎日のように自らが校長を務める夜学校で2時間ほど教えていたことが分かる。非常に多忙でハードなドージャーの日常が日記から読み取ることができる。

(3) 1933年6月5日の M. B. ドージャーの手紙の検証

西南学院の建学の精神である「西南よ、キリストに忠実なれ (Seinan, Be True to Christ)」は、ドージャーが遺した言葉であることは周知の事実であるが、その根拠となるものは何だったのだろうか？ そのことを証明する資料として、M. B. ドージャーがドージャーの死 (1933. 5. 31) の5日後 (1933. 6. 5) にミッション・ボードのマッドレーに宛てた手紙を入手することができた。この手紙も前記(2)の日記と同様、米国歴史図書館のスタッフにスキャンングをお願いし、データで送っていただいたものであるが、その部分を抜粋して以下に紹介する。

Repeatedly in recent weeks Mr. Dozier had said, "My life has been imperfect, but I have tried to be faithful." "I am only a sinner saved by Grace." The last request he made to the school that he loved more than his own life was, "Tell Seinan Gakuin to be true to Christ."

この手紙によって、ドージャーが「西南学院にキリストに忠実であるように伝えて欲しい」と遺言したことは明らかであるが、このドージャーの遺言がいつどのようにして西南学院の建学の精神として位置づけられるようになったのかということについては、別途、検証が必要である。さらに細かく言えば、現在は "Tell Seinan, To be True to Christ." あるいは "Seinan, Be True to Christ." という表記が建学の精神を表わす言葉として用いられているが、Seinan Gakuin が Seinan となった経緯についても同様に検証が必要であろう。

以上は、昨年 (2014年) 7月の第6回百年史研究会で筆者が発表した内容を紙幅の関係で一部割愛して掲載させていただいたものである。発表当日、参加者に配布した「英文資料一覧」についても掲載を割愛させていただいたので、希望される方は事務

4 1911年に宣教師達が英語と中国語を教える福岡バプテスト夜学校が開校され、ドージャーが校長となった。1917年に廃止されるまでドージャーは校長を続けた。

局に申し出ていただきたい。英文資料に関しては米国歴史図書館だけでなく、ミッション・ボードやサザンバプテスト神学校などにも西南学院やドージャーをはじめとする多くの宣教師に関係する資料等が数多く存在していると思われる。現時点では、米国歴史図書館を中心に、百年史編纂に必要と思われる資料を予算の許す範囲で収集し、翻訳しているが、西南学院史資料センター開設（2016年）後は、前述したように、まず、どこにどのような英文資料が存在するのかを調査し、それらの資料を計画的かつ迅速に収集・翻訳することが望まれる。それは、特に西南学院の前史・旧制部分の詳細な歴史の解明に必要不可欠と思われるからである。

最後に、2011年10月から西南学院の英文資料の翻訳作業に真摯に取り組んでいただきながらも2013年1月に急逝された元西南学院高等学校英語科教諭の鶴身淳一郎氏に、この紙面を借りて心より感謝の意を表したい。

これは、2014年7月14日に行われた第6回百年史研究会で発表した内容をもとにして、紀要に掲載するために改めて執筆を依頼した原稿である。